

『横浜美術館 全記録1960-2021』 公開にあたって

横浜美術館は、2021（令和3）年3月から閉館し、同年7月から初の大規模改修が着工しました。

約3年におよぶこの閉館期間を活用して、『横浜美術館 全記録1960-2021——構想、建設、開館、運営、活動』（以下、『全記録』）の編集作業が、館内各部署から選出された担当者によって進められました。

横浜市美術館基本構想委員会が設置（昭和56（1981）年）されてからおよそ40年、開館（平成元（1989）年）から30年以上を経過した時点で編纂された『全記録』は、その趣旨を概ね以下の2点に集約できます。

1. 館の多種多様な活動・運営データを年次編集し、それに基づく論考をまとめること。
2. 副題にあるとおり、横浜美術館の初期構想、建設計画、開館業務、運営課題、事業活動の詳細を総体的に可視化し、アーカイブの基礎を形成すること。

この趣旨を踏まえて、『全記録』は次の三つのパートで構成されています。

1. 論考……総論と7本の各論
2. 総合年表と資料……1960年から2021年までの、横浜美術館の運営活動史とその背景となる横浜市および国内外の情勢を、5期に画期して編集した年表、および条例・条例施行規則、決算、入館者数等の基本データの集成。
3. 個別年表……横浜美術館の事業および活動を、10種に分類して個別に年次編集したデータの集成。

* 総合年表は、個別年表の索引としての役割も担えるよう構成されています。

横浜美術館の構想は、高度経済成長期の横浜市の都市計画（六大事業）に端を発し、バブル経済の只中に建設計画が推進されました。言わば後発の地方美術館です。開館してほどなくバブル経済が崩壊し、1990年代から2000年代初頭にかけて、さまざまな制度改革が国や地方のレベルで取り組まれる状況を背景にして、館の個性を確立してきたと言ってよいでしょう。

その意味で、『全記録』はバブル経済崩壊後の地方美術館のあり方を検証するうえで格好の資料となるものと考えます。これを広く一般に公開して、ミュージオロジーや文化政策等の専門家の研究に資するだけでなく、横浜美術館の活動に関心を抱き共感を寄せてともに歩んできたみなさま、さらには横浜美術館の現職員、あるいは未来の職員にも、各様の視点や興味に基づいて活用していただける内容となっています。この『全記録』が多くの方々の目に触れますことを願っております。

なお、編集にあたり、横浜市にぎわいスポーツ文化局（旧・横浜市文化観光局）より貴重な資料の閲覧をご許可いただきました。記して謝意を表します。

2023年10月
横浜美術館

序に代えて——生きものとしての横浜美術館

平成元（1989）年に横浜美術館が開館して、令和5（2023）年で34年が経った。美術館は現在、初の大規模改修工事にともない、令和3（2021）年春から令和6（2024）年春まで3年にわたり休館している。この節目となる機会を捉え、私たちは、これまでの活動を新しい目で見直し、未来を占う拠りどころとすべく、30年余りの歩みを振り返る記録集を編むことにした。

30年という年月は、地球規模の時の流れから見れば一瞬にすら足りない。しかし、美術館という仕組みが生まれたのは（美術館の定義にもよるが）約300年前のヨーロッパ、それが日本に輸入されたのは約150年前のことである。この中で30年が占める割合は、それぞれ10分の1、5分の1と意外に大きい。

これからご紹介する諸論考では、当館の30余年が変化と模索の連続であったことが語られる。こうした迷走はしかし、ほんの300年前に生まれた若い制度である美術館がこれからもまだまだ生成変化していこう、その伸び代ゆえに生じたものと言える。

当館の変化のうち最も大きかったのは、光ディスクやS-VHSビデオ、静止画像等によって情報を提供する「美術情報ギャラリー」の縮小（平成11（1999）年度）、廃止（平成17（2005）年度）だろう（「各論07 横浜美術館の美術情報センターについて」参照）。大きな期待を背負って生まれたこの施設が担うはずだった機能は今日、インターネットがすべて引き受けている。あるいはコレクションに目を向けよう。昭和57（1982）年に定められた収集方針は、横浜が明治期以来、西洋文化受け入れの窓口だった経緯を踏まえ、第一に「ヨーロッパ近代美術と日本近代美術の相互影響の足跡がたどれる作品」の取得を掲げてきた。しかし、世界の多様な声に耳を傾ける役割こそが美術に求められる今、ヨーロッパと日本のみで構成される美術史はすでに耐用年限に達している（「各論02 横浜美術館のコレクションについて」参照）。

また、創作を主とする「子どものアトリエ」および「市民のアトリエ」は、国内の美術館として後発である当館がどんな個性を打ち出すべきか、という熱心な議論の末に生まれた、館を代表する活動であり施設だ。しかし、開館直後の1990年代初頭、全国の美術館に、「美術館教育」の名のもと、鑑賞教育拡充の機運が生まれ、あっという間に広まった。当館は先駆的なアトリエ活動を有するがゆえに、鑑賞を専門とする「教育プロジェクト」のチームの発足が平成24（2012）年と出遅れた（「各論04 横浜美術館の子どものアトリエについて」「各論05 横浜美術館の市民のアトリエについて—はじまりとこれから—」「各論06 横浜美術館の教育プロジェクトの10年間、その特徴と課題」参照）。

開館時の発想のなかには、時を経て新しく先駆性が見出されるものもある。戦後日本を代表する建築家、丹下健三（1913-2005）の手になる当館の建物は、左右対称のモニュメンタルな外観を持つ。一時期、丹下に師事した建築家、磯崎新（1931-2022）の分類に従えば、いかめしい神殿型の「第一世代」に属するデザインだ（磯崎新『造物主議論 デミウルゴモルフィズム』鹿島出版会、1996年）。建物に入ると、大階段と吹き抜けを備えた広大なグランドギャラリーが広がる。3階には、展示室同士のつながりを分断するように休憩スペースであるホワイエや回廊が置かれている。この空間を構想する際、丹下が参照した館のひとつが、メキシコ国立人類学博物館だ。『横浜美術館設計条件研究委員会 報告書』（昭和58（1983）年）をめくると、やはり吹き抜けと回廊を備えたこの博物館の図面の脇に、「各展示室にそれぞれ入口、出口があり、どの展示室へも出入り自由なプラザ方式をとっている。強制動線よりも、自由に選択でき自由に休憩がとれるこの方式は、観客にとっては、利用しやすく、好い施設といえる」との文章が添えられている。こ

うした資料からわかるのは、決まった用途を持つ展示室等よりも余白の空間を大きく取り、そこで観客の自由な行動を引き出そうとする丹下の設計意図である。展示室よりはるかに広いグランドギャラリーも同じくこの考え方に基づくものだろう。

今日、美術館は、美術を学ぶ場から、美術を通して生を豊かにする場へと移行している。これを受けて2000年代以降、金沢21世紀美術館（設計：SANAA、2004年開館）、八戸市美術館（設計：西澤徹夫ら、2021年再開館）といった、展示室よりフリースペースを多く取る美術館建築が登場した。丹下が残した大きな余白は、実はこれら新しいタイプの建築の発想に通じる可能性を秘めている。この可能性を掘り起こし、いかにアップデートするかは、これからの私たちの手腕にかかっている。

こうして34年間、横浜美術館は、技術の、世界の構造の、社会のニーズの変化に合わせ、さまざまな活動を拡大し、縮小し、また付け加えて、生きもののように姿を改め続けてきた。それはこのあともずっと続いていく。当館がたどった、そしてこれからもたどるであろう紆余曲折が、当館のみならず世界のあちこちの美術館の未来を作るよき材料となることを信じて、ここに『横浜美術館 全記録 1960-2021』を公開する。

2023年10月
蔵屋美香
横浜美術館 館長